
ゲームしてたら事故死、転生先はネギま！の世界でした

ペルシュロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームしてたら事故死、転生先はネギま！の世界でした

【Nコード】

N2279T

【作者名】

ペルシュロン

【あらすじ】

自宅でTVゲームをしていると、突然居眠り運転のトラックが突っ込んできた。

1階に居た俺は直撃を受けて即死、気が付くと周りは真っ暗で何も無い空間……

そこにテンプレの如く現れた神は、好きな世界への転生を持ちかけてきたのであった。

ゲーマーな主人公は不老の肉体と、生前プレイしていたゲームのス

キル+αを手に「魔法先生ネギま!」の世界でほどほどにチートな
第二の人生を歩き始める!

当作品には、The Elder Scroll? - Oblivi
on-、ラグナロクオンライン等のゲーム内能力が登場したりしま
す。

更新は完全に不定期です。

第〇話 ゲーマー、死して神と対話する（前書き）

初めまして、ペルシクロンと申します。

この小説は筆者の妄想を思いつきで文にしてみようという趣旨で書かれています。

また、筆者は小説形式の文を書いたことはありません。故に矛盾&誤字脱字が散見するかと思います。

「それでもいいから読むよ!」という奇特な方は、ゆっくりみていてね!!!

2011・05・14 本文&改行を修正しました

第〇話　ゲーマー、死して神と対話する

——さて、ここは何処なのだろう。

俺　こと御門^{みかど}　龍巳^{たつみ}は現在、真っ暗な空間に居る。

” 真っ暗な空間 ”

それ以外に表現しようの無い場所だった

周りを見回しても何も見えない。前後左右はおろか、上下を見てもそれは変わらない。

光も音も何もない世界で、確かなのは自分が此処に居るということだけであつた。

立つ床も無ければ寄り掛かる壁も無い。しかし落下している訳でもない。

無重力空間とはこんな感じなんだろうか？と想像させるような場所

「ここは、どこ・・・だ？」

今度は声に出してみた、そして考える。

——そもそも此処は何だ？と

少なくとも此処は自分の知らない、見たこともない場所である事は確かであり、自分が此処に居る理由も全く以って不明。

大体こんな上か下かも分からないような場所、知っている方が珍しいだろう。

「眠っていた覚えはない……となると、どういう事だ？」

眠っていたのでないなら——意識を失った？気絶か……？だとした

ら原因は？
そこまで考えた所で、変化が起こった。

真っ暗だった風景の中に、白くゆらゆらと揺れるもやの様な何か
が現れたのだ。

その白いもやは俺の前まで来ると突如、爆発的に大きく広がり、そ
してまた1箇所にとまり始めた。

しかし今度はその形が違う。白いもやは集まりその形を変えてゆく。
もやの塊は腕を成し、脚を成し、頭を成し…そして最終的には色ま
でも肌色に変わり、一人の老人の姿を形作った。

「
……」

無言。お互いに一言も発さない。否、俺の場合は突然の状況変化
について行けないだけなのだが、この俺の目の前に居る老人は俺を
凝視したままピクリとも動かず口も開かないのだ。正直怖い。

無言の時間がこのまま永遠に続くのではないかと思い始めた頃、老
人がついに口を開き――

「…ふむ、お主が今回の転生者か。」

訳の分からないことを言い出した。

「…え？何？何を言ってるんですか貴方は？というか誰ですか？そ

もそもここ何処なんですかね、気づいたら此処にいて……周りには誰も居ないし、訳が分からないんですよ」

俺はやつと時間が動き出したかのように、言いたい事を続け様に吐き出した。それを受けた老人は目を細めて言葉を返してくる。

「何じゃ？お主、自分の状態が理解できておらんのか？」

「だからそう言っている。俺は早いところ家に帰りたいんですよ」
「ふうむ……だがそれは無理な相談じゃ」

「何故！」

「お主、もう死んでおるからの」

「——え？」

そんな驚愕の事実を伝えてきた老人は、自らを『神』と名乗った。
『神』は俺が今この空間に居る理由を話してくれた。

「えー……つまり、俺が家でゲームしてる所に居眠り運転のトラックが突っ込んできて、それに巻き込まれた俺は即死。此処は魂の転生先を決める場所で、死んだ俺の魂がここに連れて来られた、と？」

「その通りじゃな」

「……ちなみに、俺の遺体はどんな感じに？」

「バスケット・オリバに縦に押し潰された楊 海王みたいな状態になっておったよ？」

—— な、何て死に方してるんだ俺！？

某霊界探偵みたいに道路に飛び出した子供をかばって・・・とかならともかく、これじゃただ運が悪くて死んだっただけじゃねーか畜生おおおおお！！

…せめて、人生の最後くらい格好良く終わりたいと思ったと思う。

「……で、俺は記憶を消されて別の何かに転生するって事なんですか？」

「ふむ、本来ならそうなるんじゃ。本来は（・・・）」

「…本来は？」

まるで自分がその本来ではないかの様な言い方だ。

「わしは転生する人間1000万人につき1人だけ、その人間が望む世界、種族、能力を与えて転生させておるんじゃが……？お主がその1000万人目なのじゃ」

「そ、それって……架空のモノとかでもいいの？」

「無論じゃ、わしの力及ぶ限りどんな条件でも構わんよ」

これは……突然の話ではあるけど、案外うまい話なんじゃないか？

せっかく自由な世界に転生できるんだから、ここは……

「じゃあ、『魔法先生ネギま!』の世界に転生させて下さい」

「よし分かった、『魔法先生ネギま!』の世界じゃな。何か望む能力なんかはあるかの?」

「なら、『ラグナロクオンライン』の全職業のスキルを使えるようにして欲しい、それと……『Oblivion』のスキルも。」

「それだけで良いのか?『ネギま』の世界でその能力は決して無敵を誇る能力では無いぞ?」

「大丈夫だ、問題無い(キリッ)と、それはともかく最初から問答無用で最強なんてつまらないでしょ。元ゲーマーとしてはこう、徐々に強くなるその成長過程も大事だと思うのですよ(キリッ)」

「……そうか、まあよい。他に何か欲しい物はあるか?」

「不老不死の肉体と、気・魔力の素質を。鍛えれば鍛えるほど伸びる感じで……っと、こんなもんかな」

「ではそのようにしよう。では転生先に送るが、時期はどうする?」

「あー……どうしよ、能力を鍛える時間は欲しいし原作開始の300年前辺りかな」

「承った。ではそろそろ送るぞ、新しい生を存分に堪能してくるといい」

「ああ、ありがとう」

『神』がそう言うつと、真っ暗だった空間は徐々に白く移り変わり眩く輝き始めた。

これから俺はネギまの世界に飛ばされるのだろう。意識がだんだんと遠のき、薄れていく中で最後に聞いた言葉は――

「あ、間違えて不死付けるの忘れちった。てへぺろ」

文句を言おうにも、時既に遅し。

(なん……だと……)

その思考を最後に、俺の意識は闇に落ちた。

――こうして俺は『ネギま!』の世界にて、第二の人生を歩み始める事となったのであった。

第〇話 ゲーマー、死して神と対話する（後書き）

さて、妄想設定を叩きつけてみたけど……この先どうしよう（え
大まかなプロットですら原作ちよい前辺りまでしか無いんだよねH
A H A H A !

龍巳君のキャラとか口調も定まらないし…

ま、なるようになるよね！いずれ固まると思います

重要 2011・5・14 キャラ設定に関わる本文を訂正しま
した

第一話 ゲームー、大地に立つ（前書き）

前話のキャラ設定に関わる本文を修正しました。

投稿直後、2011.5.14までの間にプロローグ読んで下さった方々、申し訳ありませんがもう一度プロローグ読んでください。
見切り発車した結果が早速この様だよ！

第一話 ゲーマー、大地に立つ

「む……ここはどこ……！？って、本当に何処だここ！？」

—— 光の道を抜けて目が覚めると、そこは不思議の町ではなく鬱蒼と茂る森でした。

周囲は木や植物に囲まれており、時折どこから動物の鳴き声の様なものまで聞こえてくる。

気温はやや高めといったところではあるが、活動に支障をきたすような温度ではない。

が、植物の密度が高く湿度も高い所為で体感温度が結構高いようだ。

「つつーか神！あのジジイ……最後にとんでもないポカしやがった

……！！

よりもよって不死を付け忘れられるとは……」

そう、龍巳は転生の際に『不老不死』を願っていたのだが、神のミスによって『不死』抜きの『不老』のみの体で転生する羽目になってしまったのであった。

「おい神！もう一度出て来い！ちゃんと不老不死の体にしてくれエー……」

しばらく呼び続けたものの、叫んだ所でホイホイと神が現れる筈も無く、龍巳はガックリとうな垂れた。

これ以上やっても無駄だと悟ったのか、気分を切り替えて別の事を考えることにする。

「ハアツ…！ハアツ…！はあ……さて、と……これからどうするかな。」

能力の確認とか訓練するにしても、先ずは……ん？」

今後の方針を考え始めた龍巳だが、ここでポケットに何か入っている事に気付いた。

ポケットを探って取り出したのは、折り畳まれた一枚の紙。

頭の上に「？」マーク広げながら見てみると、そこには神からのメッセージが書いてあった。

「いやあ、失敗失敗。」

お主の新しい体に不死の能力を付けるのを忘れてしまったわ！

まあそう気落ちするでない

代わりといつては何じゃが、追加で能力を与えておいたからの

お主の選んだ能力の元になった Oblivion から、「構呪の祭壇」の能力をお主に付与しておいた。

これで、お主オリジナルの魔法を作り出すことも可能になったぞ。無論原作同様作り出す魔法が強力である程に消費する魔力は大きくなるが……

お主の魔力や目的に合った魔法を作り出せる故、利便性は高いじやろ。

不死に関しては申し訳ないが、既に作り出された後の肉体を物質的にいじる訳にはいかんので……この能力で我慢してくれい

ああ、この世界に転生するにあたって、お主はこの世界の人間の言語は大半理解できるようになっておる筈じゃから言葉の心配は要らんぞ。

P・S 服装はサービスじゃ。以前のままだとその時代では違和感を持たれるじやろうからな
それでは、よい人生を。」

む…… と、唸る龍巳。

正直不死能力が無くなったのは痛い、思いの外使い勝手の良さそうな能力を引き換えに与えられたようだ。

そして手紙を読んで気付いたが、服装も以前とは違っている。

なんというか…… 布が粗いな、チクチクしたりはしないけど……これは慣れが必要だろうな。

手紙も読み終わって、次にする事は……

「まずは最低限安全な拠点が必要か…… 野宿して朝には獣の腹の中とか勘弁だわ。

その後で食糧確保と本格的な能力の確認だな…… 多分」

正直な所、サバイバルの経験なんて無いので何を優先にすれば良いのかは判らないが、安全を確保できる拠点は必須だと思う。
そんな訳で、周囲の探索を始めたのだった。

「おお…これは…！なんかいい感じだ！」

数時間歩き回って龍巳が発見したのは、崖にぽっかりと空いた岩の洞穴だった。

外から見ただけでは奥がどうなっているか把握できないのが気がか

りではあるが、雨風が凄げるといのは大きい。

洞穴奥の安全が確認できればとりあえずの拠点としては十分だろう。

「そうと決まれば、早速確認するとするか！

武器は……っと、これで行けるか？」

そう言っただけで拾ったのは近くに落ちていた長さ1m程の太い枝。

これを剣や棍棒代わりにしてみようという考えだ。どこまで役に立つのかは判らないが、無いよりはマシだろう。

「おじゃましますよ……っと」

洞穴の中を進み始めた龍巳であったが、開始早々に問題に直面した。それは……

「暗い」

その通り、暗いのである。

洞穴の中には窓なんてある訳もなし、当然火や電気のような光源も無い。

入り口からの光が届かない場所まで来れば、そこはもはや暗黒の世界。

「さうでどうするか、火なんて持ってな……あ、いや、俺持ってる！光あるじゃん！

これなら最初からでも使える…よな？いくぞ、『ルアフ』！」

そう唱えると龍巳の目前に白く光る光球が現れ、周囲を旋回し始めた。

これはラグナロクオンラインにおいて初級僧侶職“アコライト”の魔法スキル“ルアフ”、本来は光の球によって周囲に居る敵の隠密を見破る魔法なのだが、この世界では照明としての効力の方が強いようだ。

今まで全く見えなかった洞穴の内容も、これで克明に見えるようになった。

「よっし、これでOKだな！奥に進もう」

そして、歩くこと数分。ついに奥が見えたのだが……先客が居たようだ。何かが体を横たえている

「あれは……鹿か？」

そこに居たのは間違いなく眠っている鹿だ、全長は目測だが2m強といった所だろうか。

鹿の中でも中々に大きい種類だろう、どうやらこの洞穴を寢床にしている様だ。

龍巳が近付いた事で“ルアフ”の光を感知したのか、目を開けて起き上がる。その瞳には強い警戒の色が伺える。

「お……何だ、もしかして、俺が縄張りに入っただから起こってるのか？ちょ、ちょっと待っ……！？」

そう声に出そうとした途端、大鹿は角を振り回して襲い掛かってきた！

コマンド？

「く たたかう ピッ

まほう

どうぐ
にげる

「クソッ！闘るしか無いか、なら先手必勝！うおりゃあああああ
あ（ガッッ！）…あ？」

持っていた棒を鹿の頭に叩きつけようとした龍巳の腕は急停止する。得物が受け止められた音と共に（……………）見れば、大鹿がその大きく枝分かれた角で木の棒を受け止めていた。そう、刃物を受け止める十手の様に。そして十手で受け止められた武器がどうなるのか、答えは勿論……

「あっ」

大鹿が首をひねっただけで、龍巳の手から木の棒がすっぽ抜けた（……………）

突然無手になった龍巳に、この鹿を攻撃する手段は無い為――

たたかう

まほう

どうぐ

「く にげる ピッ

たつみは にげだした！

「ぬおおおおおおお！？畜ッ生、こんな場所で戦えるか！俺は洞窟の外に逃げるぞ！」

全速力で逃げ出した――死亡フラグを建築しながら。

第一話 ゲーマー、大地に立つ（後書き）

今回もご覧頂き有難うございます。

今回の話で能力の追加をしました。ぶっちゃけると、少しでも物語の中で動かしやすくする為です（え

主人公が詰んだら物語進まなくなりますからねえ…（…）

さて、次回の話でVS鹿編（！？）は終了です。

書き始めた時はただ洞穴見つけてそこで能力確認するだけの筈だったのに、どうしてこうなった…！！

では次回もお楽しみに！

第二話 ゲーマー、初めての勝利（前書き）

こんにちは、ペルシクロンです。

今回は予定より少々投稿が遅れました。

というのも、気の向くままに話を書き換えてたら当初の予定と全然違う展開になってしまって、プロット修正に四苦八苦していたのです。

今話は約4200〜4300字程だったかと思いますが、毎話4000字くらいは書きたいですねえ……

安西先生、話を膨らませるスキルが欲しいです……！

では第二話 vs 鹿決着編、どうぞ。

第二話 ゲーマー、初めての勝利

「ゼエツ……ゼエツ……はあ、フーッ……畜生ッ、草食動物つても
つと臆病なモンじゃねーのかよ！」

走って、走って、走って、進む時に数分掛かった道程を数十秒で
踏破して外に出た。

振り返って見れば、大鹿はまだ出て来ないようだ。

相手の脚力を考えれば本来は逃げ切れない筈なのだが、鹿は自身の
角が大き過ぎる所為で、曲がりくねった洞窟内を全速力で追ってく
る事はできないようだ。

とはいえ大鹿が洞窟の外まで出てくるまで、時間にそう余裕がある
訳でもない。早急にあの大鹿への対抗策を練る必要がある。

（とりあえずは逃げられたが……さて、ここからどうするか。棒は
吹っ飛ばされたから武器は無い、近接戦闘は無理だな。

なら遠距離戦しか無いな。弓矢なんて当然無いし、魔法を使う以外
に道は無し……能力が神に要望した通りになっているとしたら、ま
だ初級魔法しか使えないか。

相手は鹿、野生動物なら……火が良いな。それなら……）

そこまで考えた所で、とうとう大鹿が洞窟の外に出てきた。

その鼻息は荒く、その双眸は敵意を隠さずにこちらを睨みつけてい
る。

「ふう、あとはぶっつけ本番だな。失敗したら……仕方がない、全力
で逃げるか」

そう呟いた直後、大鹿がその大きな角を前方に突き出して突進してきた。

先程自分の武器（仮）を挟み込み、さらにそれを軽々弾き飛ばした角の頑丈さは推して知るべきであり、その角を突きたてられたりした場合のダメージは凄まじいものになるだろう。

「受けたらマズいな……避けてッ、カウンづアッ!？」

龍巳の回避しようとする判断自体は正しかった。が、少々欲を掻きすぎてしまった様だ。

即座に反撃に移る為に、最小限の動きで突進を回避しようとしたが目測を誤った所為か、通り過ぎた角の先端が胸元を浅く切り裂いて行った。

出血は然程ではないが、初めて体験する肉を切られた事による焼ける様な痛みで思うように動けない。

次の突進は避けきれないだろう。回避のみに集中すれば魔法準備が遅れ、発動前に反転・突進されて詰みだ。

ならば、回避は捨てて次の一撃が来る前にこちらの一撃をぶつける！

「この一発で決める！」

魔力を使う感覚は、先程使ったルアフである程度掴めている。

戦闘の興奮状態で跳ねる心臓を押さえながら、龍巳は精神を集中して魔力を練り上げていく。

大鹿との距離は約10m、まだ遠い、できるだけ引き付けてから打つ。

7 m まだだ、間に合う限界ギリギリまで力を溜め続ける。

4 m

3 m

2 m

1 m

(今ッ！)

練り上げた魔力を目前まで迫った大鹿に向けて開放する。

イメージは火球、目の前の標的を消し炭に変えるほどの荒々しい爆炎。大鹿に向けてかざした手の平から炎の線が現れ、急速に編み込まれるように絡み合い、ひとつの真つ赤な球として形を成す。

「ファイアー…ボール”！！”」

初級魔術職“マジシャン”の火属性攻撃呪文“ファイアーボール”龍巳がその呪文名を叫ぶと火球は龍巳の手元から凄まじい速度で飛び出し、目の前の大鹿に直撃した。

盛大に吹き荒れた爆風は龍巳もろとも大鹿を吹き飛ばした。背後にあった木に背中から衝突した龍巳は、か、と短い呻き声を上げて再び気を失った。

龍巳の目が覚めたのはそれからまた暫く経過して、日が沈んだ頃になつてからだった。

パチッ

「ん……今日はよく目が覚める……！そうだ！あの鹿は……」

そう言つて周囲を見渡した龍巳の視界に入つたのは未だ黒煙を上げ続ける、大鹿の死体だった。

「勝つた……のか……」

そう目の前の事実を口に出した途端、今まで昂ぶっていた精神が急速に冷めて、代わりに今まで鳴りを潜めていた恐怖心がようやく表に出てきたのか、指が震え出し、指から腕へ、腕から全身へと震えが伝播していった。

堪らず両腕で自分の体を抱いて、両の手を握り締める。震えを抑えるように。

今まで自分がおこなっていたのは、ゲームで行うようなLV上げの“狩り”なんかではなく、真正正銘“命の遣り取り”だったのだ。

この大鹿も、つい先刻までは間違いなく生きていた。だが、今は目の前で息絶えている。もうぴくりとも動かない。

こんなにも簡単に命は無くなる。

あっさりと、さっぱりと、すっぱりと。

それが堪らなく怖くなった。自分だって死ぬときはあっさりと死ぬのだらう、前世がそうであつたように。

暫くそうして震えが収まった頃、龍巳は自分の今後について考え始めた。

「とりあえずあの鹿、喰うか。」

幸いにしてこんがりと焼けているようだし、俺が奪ってしまった命だ。俺が食べてやる事が一番の供養になる……かもしれない

「いただきます…っと、その前にコレ、治すか。“ヒール”」

色々考えて忘れていたが、戦闘中に胸元に切り傷が出来ていたのだ。既に出血は止まっているが、このまま放っておいて傷が残ったりしても困る。

“ヒール”はその名の通り、主に僧侶や聖騎士が使う回復魔法で、上位の聖職者のヒールは大抵の傷を治しきるといふ。

何回か“ヒール”をかけると、横一文字に入っていた傷が後も残さずに消え去った。

しかし複数回のヒールはまだ自分には早かったようで、魔力を大分消耗した気がする。

「んじゃ改めて、いただきます！」

両手を目の前で合わせ、食べ始めようとした龍巳だが、焼け焦げているのは鹿の表面部分だけな訳で、近くに落ちていた平べったい石を石器ナイフ代わりに生肉を剥ぎ取って再び焼いて食べた。

初めて自分で仕留めた獲物の肉は、何か味が付いている訳では無かったのにとっても美味しかった。

腹を満たした俺は、緊張の糸が切れ、その日はそのまま眠りに付いた。

——そして明朝

昨日の鹿肉を焼いて食べた後、俺は行動を開始した。

まずはこの洞穴を拠点にして、最低限の生活を維持できるようにする。つまり衣・食・住の確保だ。

この内、『衣』と『住』は一応解決している。

『住』は、昨日の戦闘によってこの洞穴はめでたく俺のねぐらとなっており、そこそこ深いお陰で気温の変化についての心配はあまりしなくても良いだろう。

暗い部分に関しては“ルアフ”で照らしている為、暗さで困ることは無い。さらに夜間の目印兼獣除けとして、入り口前にたいまつを炊いておいた。

『衣』に関しても、一応今来ている服がある訳で。

となれば後は『食』である。

さっき食べた鹿の肉も、まだ残りがあるとはいえいずれ尽きるだろう。コンスタントに供給できる食物が必要だ。

それに、いずれはこの洞穴を出て移動しなくてはならないだろう、流石に一生をここで過ごすのは御免だ。その際には保存食も必要になってくる。

「まずは……この辺りを探して回るか」

そして日が傾く頃、戻ってきた龍巳は洞穴の中で座り込んでいた。
というのも……

「こいつは嬉しい誤算だな」

胡坐をかいて座っている龍巳の目の前にあるのは、積みあがる果物。食料の確保に苦労する可能性も考えてはいたがどうやら、幸いにしてこの周辺はかなり食物の豊富な地域のようなのだ。

おまけに湧き水の水源まで発見できた。とりあえず食生活で困る事は無さそうだ

それに伴って動物類もそこそこに多く生息している為、大型動物や肉食動物との遭遇などの危険もあるだろうが……

「そこは訓練の相手になってもらうとするか、これから“力”は確実に必要になってくるだろうしな。

それにしても、今日見た限りじゃこの辺りには人が住んでいないみたいだが……ま、明日以降もちよくちよく探してみるさ。とりあえず今は飯だ飯」

今日は一日中動き回って疲れた。さっさと寝て明日に備えるとしよう――

――そして再び翌日、当面の食料の心配が無くなった龍巳は自分の能力の確認をする事にした。

「まずは“魔力”と“気”の感覚を掴む事だけど……これは今更だな」

初日の大鹿との戦闘、それに翌日の周囲の探索で魔力と気の使い方に関しては一応理解できていた。

“気”によって身体強化をするだけなら最初から可能だった様だ。

「鹿の時にこれが使えてればもうちょい楽に勝てたかもな……さて、

次はスキルだな」

転生時に付与された能力、『ラグナロクオンライン』『Obliivion』のゲーム内スキルを使用可能になるという物だが、これについては面白いことが判った。

前衛系職業のスキルの効力は“気”の強さに依存し、後衛系職業のスキルは“魔力”の強さに依存するという特性があることが判明したのである。

これは恐らく、神が俺をネギまの世界に転生させるにあたって自然が無いように矯正してくれたのだらう。

つまり、“気”を中心に鍛えれば前衛としての能力が高まり、“魔力”を中心に鍛えれば後衛としての能力が高まるということだ。しかし、これには欠点もある。

魔力と気を同時に扱うことは非常に難しい。同時に使用することとは、即ち究極技法“咸卦法”であり、そう易々と習得できるものではないのだ。

つまり、魔力を使っている最中は物理攻撃に弱くなり、気を使っていると魔法に弱くなってしまうのだ。こればかりは修行あるのみである。

「まずは“気”をまとって、と」

龍巳は洞穴前にある木の前まで歩いて行き、そこで木に対して構えを取ると

「っ ショラアッ!!」

その木を思い切りぶん殴った。

木はゆらゆらと揺れて、上の方では茂った葉ががさがと音を立てて鳴っている。

「普通に全力で殴るとこんなもんか、なら次は……」

再び構えを取り、今度は右腕周辺に気を集めて

「バツシュ」！！」

と叫んで再び拳を木に叩き付けた。すると、先程殴った木は大きくしなり、激しい音を立てて揺れたではないか。

これは剣士の初級攻撃スキル“バツシュ”だ。本来は武器を激しく叩きつけるという基本的な攻撃スキルだが、素手でも使用可能なので今後も重宝するだろう。

「おゝ、揺れてる揺れてる。殴った手も痛くないし、“気”ってすげえな。」

そして、『Oblivion』のスキルなのが……

「今は試せないな、道具も無いし……せめて乳鉢と乳棒があれば話は別なんだが」

比較的效果が判り易い“錬金術”のスキルで確認をしようと思っていたのだが、よく考えてみれば“錬金術”を行うための器具が無いという事に気付いたのであった。

他にもスキルはあるのだが、“刀剣”“鍛冶”“開錠”“商才”“話術”など、今のところ実践できない物が大半を占めているのが現状である。

恐らく、戦闘関連のスキルは魔力や気に依存するのだろうが……これは後に回して他の確認に移ろう。

「魔法の創造能力”ねえ……これも暫くは使わないかな？使えない魔法を作っても仕方ないし」

という訳で、一通りの能力の確認が済んだ。

当面は気と魔力の扱いを中心に鍛えていく事になりそうだ。

「まずは生き抜く為の力を手に入れる、その為にも自分の力についてよく知っておかないとな……」

龍巳は当面の己の目標を作ることにした。それは――

「まずは最低10年、この周辺で生き抜く。よし、これで行こう。幸い時間はたっぷりある、せめて自分の身くらい自分で守れる程度には強くなるさ」

こうして龍巳の修行&サバイバル生活が始まったのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2279t/>

ゲームしてたら事故死、転生先はネギま！の世界でした

2011年10月9日01時32分発行